

# 山に生き 遭難救助に命を懸けた 上高地の大將

**木村 殖** (きむら しげる)

**堀金 三田区出身**

(木村殖が活躍した時代) 1905(明治 38年) ~1974 (昭和 49年) 享年 69歳

明治	大正	昭和
38	11 14	2 4 6 8 9 12 29 38 49
堀金三田に誕生 りの基礎を学ぶ	高等小学校卒業後、 三田夜間補修学校へ 入学する。 堀金小入学。豆腐作	徴兵 領事館員(外交官) をを目指す 結婚 父に代わって山小屋 に住む 初めて上高地に入 り、山に魅せられる 木村小屋が建つ 帝国ホテルが完成 し、住み込む 登山観光客が減る 帰国 召集され参戦 北アルプス南部遭 難救助隊長に任命 る 登山ブーム 警察協力賞を受け 逝去

## 北アルプス南部遭難救助隊 隊長に命ぜられ、救助件数1500件！

山で死んではならない。  
『引き返す勇氣』こそが  
本当の勇氣なのだ、、、



外交官志望で受験勉強として上高地に入った木村殖は、山に魅せられそのまま上高地に住みつきました。

木村は、戦後の登山ブームにより登山客が増えると、遭難者やけが人などが多発してきた事を受け“お助け小屋”として**木村小屋**を設置。そこに訪れる多くの登山客や、皇族、後のアルピニスト達などの**山案内人**として暮らすうちに「**3代目 上高地の主**」となりました。

**北アルプス南部遭難救助隊長に命ぜられた**後は、40年余にわたって、登山者の救助活動にあたりました。**救助の数は、1500件にも及んだ**といわれています。

### ～北アルプス南部遭難救助隊(現・北アルプス南部地区遭難防止対策協会)のはじまり～

遭難事故が多発する中、1955(昭和 30)年、全国に先駆けて設立されます。木村殖をはじめとする強靱な山案内人たちに刺激をうけ、救助のいろはを教わった隊員たちは全国トップレベルの救助隊に成長しました。**現在の登山者を守る救助態勢は、木村殖はじめとする先人たちの努力を受け継いで出来たもの**なのです。

#### 〈痛ましい遭難事故〉

昭和 42 年 8 月、松本深志高校の生徒が西穂高で落雷にあい 11 名が死亡する大惨事。雷鳴がとどろく中、遺体を柴檣しばそりにのせてザイルで結び、背負子せおこに代えて運んだその搬出は困難を極めました。悲運に見舞われた少年を、一刻も早く親の胸に抱かせようと、二次災害も危ぶまれる中を木村が率いる隊は必死の作業を続けたといえます。

#### 〈心中しようと山に入った二人を説得する〉

上高地を最後の地にしようと山に入る若者は後を絶ちません。中でも、大事に至らず保護できた時は、殖はいつでも「君は一度死んだのだ。だから今では以前の君ではない。そう思って歯を食いしばって生きるのだ。後で必ずあの時死ななくてよかったと心から思える日がくる。」と説得し、もう一度生きなおす力を木村は与え続けたのでした。

#### 〈遭難した人々を茶毘に付す〉

遭難死した登山者を茶毘ちびに付すという、大変辛い仕事も木村は引き受け、500 人以上の人々を山で茶毘に付しました。「山で死んではならない。なぜなら、人にはやさしい親や兄弟姉妹、恋人たちがいるからだ、、決して無謀な登山をしてはならない」と木村は繰り返し伝え続けました。

### ～歴代上高地の主たち～

#### 1代目 上条 嘉門次 (1847年～1918年)

「日本アルプスの主」ともいわれ、ウォルター・ウェストン(北アルプスの名を世界に紹介したイギリス人宣教師)の山案内をしました。狼の腕は一流。妻子がいても独り山に暮らす気難しい性格でしたが、慎重さや判断の的確さは称賛されていました。嘉門次と山を共にした人達には、立派なアルピニスト達が多く育ちました。

#### 2代目 内野 常次郎 (1884年～1949年)

嘉門次に弟子入りした常次郎は、狼の手ほどきを受け「仙人」と呼ばれ山に生きました。小屋にあるものは自由に使わせ、ある材料は全てふるまうなど無欲でお人よしな人柄で学生達に大変慕われました。遭難者に対し「足があるから歩くのでなく、考えながら歩くのぢや。」と泣きながら死を悼んだといえます。木村殖とは20年以上、共に暮らしました。

#### 3代目 木村 殖 上高地3代目の主は 心優しい「ひげ爺」と慕われました。

参考文献 HP 安曇野ゆかりの先人たち 「上高地物語」 横山篤美 信州の旅社  
「上高地」 串田孫一・斎藤嘉明 岩波書店 「黎明の北アルプス」 はまみつを 郷土出版社  
「上高地の大將」 木村殖 実業之日本社 ・「北アルプス 上」 信濃毎日新聞